

島崎藤村研究

——一九二〇年代を中心に——

栗原 悠

序章

「序章」ではまずこれまでの島崎藤村研究状況について確認し、本論の問題設定を行った。島崎藤村は戦後の日本近代文学という研究領域において重要な位置を占めていた。そこでは「春」など藤村自身をモデルにしたとされる小説を中心に議論が進められてきたが、作家の個々「私」の問題を重視する方法論が下火になるとともに対象としての存在感は失われていった。一九九〇年代以降、こうした研究史自体を相対化しつつ「夜明け前」を中心とする一九三〇年代以降の動向とナショナリズムの問題に注目した議論が多く積み重ねられてきたが、本論ではかような研究状況を踏まえ、そのなかで注目されることの少なかった一九二〇年代を分析の対象とする。当時の藤村は小説のみならず感想文、旅行記、詩集といった諸テクストにおいても「私」を前景化させていた。その一方、同時代に目を向ければ〈社会〉のさまざまな問題が言論の対象となっており、藤村自身もまた強い関心を持っていた。本論ではそのような藤村のテクストと〈社会〉がいかに関わったのかを検討し、その動態的な把握を目指した。

第一部 模範としての日本詩人・松尾芭蕉の再評価

「第一部 模範としての日本詩人・松尾芭蕉の再評価」では、これまでも繰り返し議論されてきた藤村・芭蕉の関係について、一九二〇年前後からの藤村自身の感想文などにおける芭蕉評価の変節に注目し、それがどのような背景によってもたらされ、またその後の創作に対していかなる意味を持ったのかという問題を探った。

まず「第一章 藤村における子供のモチーフ——津田左右吉の松尾芭蕉・小林一茶評価との比較を視座として——」では、子供との友好的な関係の重視やそれと関連するユーモアといった論理の相同性、あるいは藤村自身の蔵書における津田左右吉の著作への関心のありようといった点から当時の藤村が一連の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（一九一六・一九二二）の問題設定を念頭に置きつつその芭蕉観を構築したのではないかと論じた。本章は従来ほとんど言及されることのなかった藤村・津田の関係を明らかにするとともに、長らく個人的な問題としてのみ捉えられてきた藤村の芭蕉評価に〈公共性〉^{II} 国民国家論的な文脈が潜在していた点、加えてそれによってこの後に浮上してくる子供とい

う創作上のモチーフが藤村の実生活上の課題でありながら同時に意識的に選択されたものであった点を指摘し得た。

一方、「第二章 一九二〇年代における松尾芭蕉受容——太田水穂主宰『潮音』との交渉から——」では短歌雑誌・『潮音』における主宰者・太田水穂の芭蕉論と彼が阿部次郎や和辻哲郎らを招き、誌面上で座談会として連載されていた芭蕉研究会の存在に注目した。藤村と水穂が小諸義塾以来の旧知の仲であったことはこれまでもよく知られていたが、本章では近年に更新・再整備されてきた書誌情報に基づき、『潮音』に発表された藤村の感想文のほとんどが芭蕉に関連するものであり、かつその内容が同誌に発表されていた水穂の方法論的な理解を参照していた可能性を指摘した。また、この関係を明らかにしたことによって水穂自身の論理が立脚していた人格主義などの同時代の思想・哲学の議論と藤村の接点を浮かび上がらせた。

以上の二章では一九二〇年前後にあった藤村の芭蕉論の変節をそれぞれモチーフの面と方法論の面から検討し、今まで芭蕉との関係では顧みられることの少なかった、藤村の「私」の問題とは別の論点を示した。また、これによって藤村・芭蕉の関係をその後の創作上の諸論点へと連接されうる問題意識の萌芽として定位し直した。

第二部 小説テキストと社会思想の交差

「第二部 小説テキストと社会思想の交差」では、一九二〇年から一九二七年の間に発表された「涙」、「ある女の生涯」、「三人」、「嵐」、「分配」の五つの小説テキストを対象にとり、この間の〈社会〉における問題がどのような形でそれらのなかに描出されたのかを論証した。

まず「第三章 「涙」とその問題系——掲載誌『解放』の論調との交差——」では、藤村自身が生前の自選アンソロジーから除き続けてきたがゆえに従来ほとんど言及されることのなかった「涙」（一九二〇）について掲載誌の『解放』の当時の論調を補助線に論じた。日本にマルクス・エンゲルスを本格的に紹介するさきがけとなった同誌では当時山川菊栄らによって私有財産と一夫一妻制が結託することによる女性の権利問題が盛んに取り上げられていたが、本章ではテキストの分析を通じて「涙」がかような議論を物語のなかに構造的に取り込んでいたとし、藤村とマルキシズムとの接点とそれに伴う近代国家への相対化Ⅱ〈社会〉への意識という論点を提示した。一九二〇年代の最初にそうした小説テキストが書かれていた事実を改めて掘り起こすことによってその後の創作における問題設定に相続されていく理路を示した。

次に「第四章 「ある女の生涯」における信仰——森田正馬の〈患者〉認識との比較を中心に——」では、まずその語りと物語の舞台となった病院の院長・森田正馬の〈患者〉言説の論理的な相同性を確認し、それがテキストにおいて批判的に捉え返される過程を論じた。また、これと並行して森田の天理教や大本など同時代の新興宗教に対する議論を念頭に「御霊さま」の問題に焦点を当て、のちに顕在化する平田国学への視点を見出した。この問題の分

析によって前近代的な宗教信仰を否定する根拠としての近代的な合理主義の「合理性」が天皇制国家の論理に支えられていたがゆえに成立していたことに対するテキストの批判的な姿勢を指摘し得た。「ある女の生涯」(一九二二)は、「夜明け前」の問題意識を既に含んでいると指摘されてきたが、本章ではそれを具体的な読解によって明らかにしつつ、「夜明け前」に描かれた時代ではなく、そこから相続されてきた当時の現代的な問題としての「合理性」に対する懐疑について論じた。

続く「第五章 「三人」に見る知識階級の女性への視座——学都・松本と女子教育——」では、のちに藤村と結婚する加藤静子がモデルの一人として登場する小説「三人」(一九二四)を取り上げ、従来はこのテキストの読みにおいて等閑視されてきた残る二人の松本の女性教員という境に着目し、そこから同時代の教育観の対立問題へと議論を展開した。文部官僚・澤柳政太郎の影響のもと、早くから教育に力を入れてきた都市・松本では一九一〇年代から一九二〇年代半ばまで生徒の個性を重んじる自由教育が盛んに行われていた。しかし、この風潮に共産主義・社会主義的な問題を看取した国と県は、川井訓導事件に象徴されるように国家道徳Ⅱ修身教育の強化によってそれらを駆逐していった。テキストにおいて女性教員を辞めようとしている二人の存在をそうした趨勢のなかに布置し、中央・東京の男性中心の文壇からは不可視化されていた地方・女性知識階級の問題を描出していた小説として「三人」を価値付けた。

次いで「第六章 「嵐」における〈ユーモア〉の志向とその帰趨——松尾芭蕉評価との比較を視座として——」では、ほかと同様、自身の身边に取材しながら藤村には珍しく「私」を焦点人物とする「嵐」(一九二六)を取り上げた。この小説テキストは東洋・日本の伝統的な芸術の流れを汲む「心境小説」として評価されながら、それに対置された「本格小説」としても好意的に読まれた。この一見矛盾した評価について、本章は「私小説」・「心境小説」の伝統の象徴として芭蕉がたびたび言及されていた点に注意し、第一部で検討してきた感想文の問題を参照しつつ、「嵐」においては伝統の評価を脱構築的に更新する〈ユーモア〉の体现者Ⅱ芭蕉が「私」の造型に重ねられているという論理を指摘した。また、それが東西文明的な評価軸に対して「普遍性」をアピールし得たと把握したが、その「普遍性」からは東洋という枠組が欠落しており、そこにナショナリズムとコスモポリタニズムの危うい結合を看取した。

最後に「第七章 「分配」における経世済民の思想——早川三代治とヴィルフレド・パレートの経済学を視座として——」では、これまた「私」を焦点人物として「嵐」の続篇的な位置付けを与えられた「分配」(一九二七)を取り上げる。円本ブームの印税を公平に分配する顛末を描いただけと切って捨てられた「分配」だが、第七章ではまず物語における同時代の経済状況の描写に注目した。そこから藤村が小説執筆の直前に出会った経済学者・早川三代治と彼が最も影響を受けたヴィルフレド・パレートの理論を補助線とし、それらを念頭に「私」の均等分配という意思決定がなされた可能性を指摘した。それによって「分配」における資源分配の方針を結果の平等ではなく、自由競争が十全に行われうるスタートの平等の担保を意図するものだったと結論付けた。さらに藤村自身の〈社会〉の不平等・不均衡

を問題視しつつ、同時に資本主義社会を全面的には否定しない視座を剔抉し、共産主義・社会主義的な問題意識に理解を示す一方でそれらとは別様な解決策を模索する新たな姿勢を見出した。

以上の五章では、時代と共に揺れ動く藤村の〈社会〉への関心のありようをそれぞれの小説テクストの構造や語りの問題から読み解いてきた。そこでは共産主義・社会主義的な問題設定に共鳴し、時に現行の天皇制への批判も覗かせながら、一方で日本という国家には強い帰属意識を持ち、ありうべき自由市場での公正な競争を肯定していく理路を看取ることが出来た。

第三部 転回としての紀行、詩集

かような転回を以て一九二〇年代の藤村における断続的な短・中篇小説の試行は幕切れとなり、この後は「夜明け前」の準備に取り組んでいく。「第三部 転回としての紀行、詩集」では、このタイミングで発表された別のジャンルの二つのテクストに焦点を当て、それらが従前のテクストをいかに定位したのかを分析した。

「第八章 「山陰土産」における〈素人〉の企図——方法としての旅行記——」では、山陰地方横断に取材した旅行記「山陰土産」（一九二七）を取り上げ、それが大阪朝日新聞社の「名家の旅」という企画の趣旨とは裏腹に、敢えて〈素人〉性を強調した叙述がなされている点に着目した。次いでこの選択によって土地に対する無知を装いつつ、それと連動するよう新たな作家主体としての「私」がパフォーマティブに立ち上げられていく動態を指摘した。また、山陰という地方への訪問が第一章や第四章などでふれた出雲・大國主信仰というモチーフへの言及を正当化させ、その評価のありようにはここまで見出してきた天皇制のもとでの近代国家・日本への批判的な視線が内包されていたことを併せて論じた。

最後の「第九章 岩波文庫『藤村詩抄』における編集の意味——詩人としての自己イメージ形成——」では、藤村がかつて発表した詩集を自らの手で編み直した岩波文庫第一弾（一九二七年七月）の企画『藤村詩抄』に注目した。ここではまず訂正増補四九版『藤村詩集』や『早春』といった前後の版との比較から旧詩の複雑な解体・結合あるいは配置転換によって構成された『藤村詩抄』の特性を整理した。さらにその方針を各詩の従来の解釈や前八章に見出された諸論点との関係を掛け合わせつつ検討し、そこから詩人の主体が再生されていく物語が中核に据えられている点、「おくのほそ道」の旅程の強調や北村透谷との対比などのモチーフが従前の版よりもはつきりと打ち出されている点を指摘した。また、最後にそうした詩集の特性を再び同時代の文脈に置き、『藤村詩抄』がその刊行とほぼ同じタイミングに連載が始められた「山陰土産」などと一体の企図によって編まれた詩集であったことを明らかにした。

以上の二章ではこれまでのテクストの実践を参照しながら、作家主体を書き換えていくとする企図を読み取ることが出来た。

「終章」では、以上の三部九章によって藤村における「公」・「私」の問題、複合的なジャンルの問題を一体的に論じ、一九二〇年代の営為を具体的に捕捉し得た点を成果としつつ、ここで見出された論点がいかなる形で「夜明け前」に取り込まれていったのかを検討することが次なる課題であるとした。